
RPG PLAY START

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R P G P L A Y S T A R T

【Nコード】

N 1 9 8 6 Q

【作者名】

優

【あらすじ】

ここはどこだ？おれは今、家で芽依とゲームをしていた…はずなのに…ここは…ゲームの中。これからおれたちのたびが始まる。しかもおれらはちよーレア職業！
もとの世界にもどれるように…

「ここどこだ？わけがわからない…」

柿内優弥

「ここはどこだ？芽依…どこいったんだ？」

おれ…柿内優弥は今、混乱中。

おれはただの普通の高校生。のはず…。

芽依というのは、Webで知り合った人。でも…高校が同じになるなんて考えてもいなかった。

でも…ただの友達ではない。おれと芽依は付き合っている。おれは、彼女にいろいろ迷惑をかけている。あいつは学年トップの成績をとっていて、頭がきれる。なのに…オレが彼氏なんかでいいのか考える。

そんなことはいいが、まぢでここ…どこなんだ？

「ユーヤ、ユーヤ…うちの彼氏さーん」

と芽依は叫んでいた。

「いるよ芽依。ここどこなんだ？」

芽依はなぜだか、オレの頭上に目線がいつていた。

「なんかあんのか？」

と大阪なまりな感じで言った。

おれはもとは大阪に住んでいたから…

どうでもいい話ばかりですまん。

「ユーヤの頭上にHPとMPっていう2つのバーがあるの！なんか理由が…。ここってまさか…」

「中かもしれんな…『バライヤの冒険』…この場所…」

「この原っぱ…よーにてる…最初の村…クラン村の近くの原っぱに…」

とそのとき…

「すみません。すみません」

と声が聞こえた。

2人はおそろおそろ振り返った。

この後俺達はどうなるんだろ…

私はどうしてここにいるの？教えて…

桃瀬芽依

「すみません。すみません」

わたしとユーヤは恐る恐る振り返った。

とその時…

「やっぱ、ユーヤと芽依ちゃんじゃないの。よかった！！知っている人がいて…一人だったら…」

と現れた人が言った。

ユーヤは口を開いた。

「シヨウか。なんで、こんなでかたしてるの？」

この人は宮石翔太。名前が長いからシヨウと呼んでいる。もちろんシヨウもゲーマー。

「別にそーゆーわけじゃないんだけど…」

「でも…シヨウもゲーム中に入ってきちゃってるの？」

「どういうことなの…芽依ちゃん？」

「言葉のままの意味だよ」

わたしは言った。

「まあ…ゲームの世界なら行ってみよーぜ…あそこに…」

とユーヤが言った。

そして私達は

村を目指した。

「疲れたな！！だから…もうそろそろステータスを見ない？」

とシヨウが言った。

「まあ…いいか。これは見たほうがいいことだからな！！」

「待ってましたあゝ」ユーヤのその言葉を！！」

3人は一斉にステータスウィンドウを開いた。

「LVはみんな1ではないみたいだね」

「僕はグルーフォーターで、LV60だよ」

とシヨウが言った。

「オレは…ソードリアンで、LV80だ!!芽依は…」

「私は、ステイックリーシャンで、LV73だよぉくん!!どぉ?」

とシヨウに対して、自慢気に言っただけを見た。

「やっぱ芽依ちゃんはすごいな!LV73はかなりの高レベルだよっ!!」

とシヨウが返してくれた。

「ありがと!シヨウも…グループリーダーはレベルUPに莫大な経験値が必要なのにLV60なんだもんっ!!シヨウも充分すごいよ!!でも…何て言っただけで、一番すごいのは…ユーヤだよぉ!!LV80は強すぎるよ!!」

と私はみんなを褒めた。

「もうそろそろ…出掛けるか!かなり休んでしまったかんじがする。早く町に着いて、元の国…日本に戻りたいから。親も心配しているだろうし…」

とユーヤが言い、私達もうなずき、出発した。

私は歩きながらいろいろ考えた。

私はいつ日本という、故郷に帰ることができて、それはいつになるのか…。私達の旅はどうなるのか…。まずは、ここの情報が必要だと思う。私は、日本で学校に通っていた時は、常に学年トップの成績をとっていた。だから、中学生の時、いじめの標的となっていた。しかし、私は耐えていた。なぜならば…わたしには、ゲームやパソコンで分かち合える友達がいいた。それは、ユーヤとシヨウだ。2人はいつしよの学校になる前から知り合いだった。2人から励まされ、通っていた。私はゲームをしながら思った。ゲームの中にいるような勇者になりたい…。今ではそれが叶っている…。だから内心はとても大喜び。

これから私達はどうなるんだろう…。早く平和な日本に帰りたいと思うっている。

ほんとにゲームの中？嬉すぎる

宮石翔太

僕は中学生の時…不登校だった。

だって、クラスの人、僕のことをいじめてくる。

だから…高校も入ったは入ったけど…また、入学式の日から僕はいじめられた。

中学のときは、みんなが僕をいじめてきた。

しかし、高校では違った。今の大親友のユーヤと芽依ちゃんが助けてくれた。

そのとき僕は初めて、生きがいを感じた。それからだった。僕の人
生が変わった。

「あとののくらい？ユーヤ…疲れたあ」

と芽依ちゃんがユーヤに甘えていた。

ユーヤばかりずるいっ！！

って毎日思う。

「あと少しだ！！がんばれっ！」

とユーヤは言った。

とその時だった。

「ギャオー！！」

と何かのうなりごえが聞こえてきた。

「モンスターだ！！2人共…行くよ」

とユーヤが言った。

僕はいつも思う。

ユーヤは頼りになる。

頭は僕よりもいいし、まあ…彼女がいるくらいだから、かつこいいし、ユーヤのいいところは何個でもあがる。

芽依ちゃんもそうだ。

芽依ちゃんは頭がユーヤよりきれて、かわいい。しかも…行動が早い。

しかも…

モンスターが出て、焦っていない。

まるで…僕とは比べ物にならないくらいすごい。

「ロイヤルテーパーン♪」

と芽依ちゃんが唱えた。

コホンッ。

これは、いつでもどこでもどこにでもレポートができる。しかも…かなりの実力が必要であり、レベルも必要。覚えるのにも魔法書のなかでもかなり入手が困難な書物に記載されている。

3人は一瞬にして、モンスターのところに着いた。

「バイプロウ♪」

とユーヤは言つて、見つけた剣で、モンスターを切り刻んだ！

バイプロウは威力はとつともない威力である。しかし、HPとMPの消費量が半端なく、大きい。

「クラーク♪」

と芽依ちゃんが唱えた。

クラークとは、特定の人、一人のHPとMPを回復する技である。

芽依ちゃんもグッドタイミングで回復魔法を使うんだからっ

と僕は思った。

「ありがと芽依。」

「礼にはおよばない。うちはユーヤが好きだから…殺したくないから…やった。」

と芽依ちゃんが言った。

また…。はずかしがつて…ずるいっ！僕にもほしい…。彼女という名の女の子が…。

俺達はどうなるんだろう？

考えていたその時…

「助けていただきありがとうございます♪私は、アリア・ローフアです」

僕はへっと思った。

彼女の目線はユーヤだった。

それを見た芽依ちゃんはかなりキレていた。

「ねえ…あんた誰？勝手にうちのユーヤに手出さんといてな！！」
となぜだか大阪混じりの言葉で返していた。

「どういうこと！！あたしはね…助けてもらったお礼をしているの！！なんか文句でもある？あるならバトルで決着つけてもいいけど…」

「私はいいけど…あんた何レべなのよ♪私と戦える實力はあるの？そこからだよっ！！」

「あたしはね…8レべだけどなんか文句ある？私が住んでいる町の中では強いほうなんだからっ！！」
と自慢気に言ったが…

「8！？笑わせないでよね！！」

こんなことになっちゃったよ…。

ユーヤ…ここはおまえの出番だよ
と言いたところだよ。

だって…

ユーヤのことでこの2人はもめているんだからっ！！

2人を止めることができるのは

ユーヤ…おまえしかないんだよ♪

もう…

これからどーなるんだ？

想像もつかないよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1986q/>

R P G P L A Y S T A R T

2011年1月25日18時31分発行